

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 9 月 11 日現在

機関番号：22101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02892

研究課題名(和文)日本の医療系学生の国際化への意識と行動変容をもたらす国際交流のあり方

研究課題名(英文)The way of international exchange program that brings about changes in the awareness and behavior of Japanese co-medical students toward internationalization

研究代表者

白石 英樹(Shiraishi, Hideki)

茨城県立医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：50306643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：今回、国際交流において「留学生受け入れ交流」と「海外訪問交流」を実施し、交流前・後で日本人学生の国際交流への意識変化や行動変容などについて調査した。「受け入れ交流」でも交流機会の少なかった学生群では、意識変化・行動変容はほとんど想起されなかったが、「受け入れ交流」でも交流機会が多かった学生群や「訪問交流」を行った学生群では、国際交流や日頃の授業への良好な行動変容が見られ、訪問学生群では国際交流で得られるものも有意に多かった。向性検査においては、国際交流後には変化は見られなかった。受け入れ交流では、留学生との交流時間のみならず、共同活動を多く設定するなど、交流環境を整えることが重要と考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回、国際交流における「受け入れ交流」による効果を高める内容について、「交流の機会や時間の少ない学生群」と「多い学生群」、また「訪問交流学生群」にて調査・分析を行った。結果より、授業などで留学生と関わるのみではなく、交流する「時間の多さや協働して活動をする機会の多さ」など、相互に交わる「濃度」が日本人学生の国際交流への姿勢や日頃の授業への姿勢の変化を想起させる因子となっている可能性が示唆された。本調査より、国内での「受け入れ交流」を通じた日本人学生の国際交流への意欲や行動変容を想起させる要因の一つを示唆することができたことは、国内での受け入れ国際交流を実施する際に役立つ情報になるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The questionnaire survey on the students' awareness and activity for international exchange was conducted for the students had an international exchange reception and visitor programs. The results showed that there was little change in the students who had not so much time with international students in reception program. However, the students who had a lot of time with international students showed positive changes in their attitude and motivation for classes. The visitors program students also showed a positive trend in their classes. Furthermore, the students who participated in the visitor program gained a great deal from their international exchange. However, these international exchange programs did not influence the students' Intro-Extroversion. It is thought to be an important factor for the international exchange reception program, not only in terms of time, but also in terms of multiple opportunities (collaborative activities) with international students.

研究分野：作業療法

キーワード：受け入れ国際交流 訪問による国際交流 国際交流への意識 行動変容 交流j時間頻度

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、医療を取り巻く環境は急速にグローバル化が進み、介護・看護職ではアジア圏からすでに多くの外国人が日本で就職しており、また国内で生活する外国人は現在では約 238 万人(2016 年)に達している。このような新たなグローバル化時代に対応し、国内の外国人への医療対応や国際的な連携を図れる医療技術専門職業人の育成は急務であり、リハビリ専門職領域においても国際協働・連携のできる人材の育成は喫緊の課題である。研究代表者の勤務する医療系大学において、4 年前から台湾の高雄医学大学の作業療法学科の学生を受け入れ、その後、理学療法学科や放射線技術科学科の学生を受け入れるなど国際交流・連携を発展させてきている。しかし、こうした国際交流・連携を持続し国際協働へ発展させていくには学生や教職員の意識改革は欠かせない。そのため、国際交流・連携をしていくにあたり学生・教員にどのような課題があるのか、また国際交流や連携を行うことでどのような変化や行動変容をもたらすのかを横断的・縦断的調査により明らかにしていくことは、国際協働・連携のできる医療技術専門職業人の育成には重要なものと考えられる。文部科学省による 21 世紀医学・医療懇談会第 4 次報告では、医療に関わる留学生の受け入れや外国語による教育プログラム、留学生のニーズにこたえる短期集中型の特別プログラム整備など組織的な受け入れ体制の整備、また海外の大学において臨床実習を行ったり、国際医療協力の現場での体験学習を行ったりすることは、学生の国際的視野を広げ、将来国際医療協力へ従事する動機付けともなるなど極めて有益であり、各大学において、そのような活動を積極的に単位として認定するなどの取組を促進すべきであるとしている(文部科学省、1999)。一方で、産業能率大学の「新入社員のグローバル化意識調査(2010 年, 2017 年)」によると、アジア各国では自国以外の就業を希望する割合は、中国 80%、香港、台湾、シンガポールでも 50% に対し、日本人新入社員の 49.0% (2010 年) が (2017 年では 60.4% と増加)、海外で働きたいとの内向き志向がより高まっている。これらのことを踏まえ、現在の日本の国際交流教育の中心は、学生派遣よりも留学生の受け入れとなっており、留学生の受け入れは留学生のための教育から、留学生と日本人学生の交流を通して日本人学生の国際的視野の育成も期待するよう変化してきている(茂戸藤, 2012)。このような国内外の状況の中で、研究代表者が勤務する医療系大学において、台湾の高雄医学大学との協定締結により留学生の受け入れや訪問交流など国際交流・連携の場を本学学生に提供できるようになった。本研究では更なる医療系学生の国際交流・連携の発展につながるように短期フィールドワークを通じた台湾学生受け入れによる交流に加え、台湾の高雄医学大学への「訪問交流・連携」による双方向の人的交流を進め、学生・教員の国際性(グローバル性)への意識や行動変容、学修内容や教育内容の変化などを横断的・縦断的に調査・研究することはとても意義が大きいと考える。短期受け入れによる国際感覚への意識と行動変容がどの程度想起され、またどの程度持続されるのか、また受入のみならず高雄医学大学への「学生・教員の訪問交流」を行うことで国際感覚への意識と行動変容の程度がより一層高まるのか、より一層持続するのか、あるいはどのような交流・連携(教育・研究)がこうした国際化への意識や行動変容を高め発展させるのか、を調査し取り組んでいくことは国際連携を図ることができる医療技術専門職業人を育成していく上で重要と考える。

2. 研究の目的

【目的】本研究は、台湾学生(留学生)の受け入れによる国際交流(受け入れ交流)と台湾を訪問して現地での国際交流(訪問交流)の二つの国際交流活動を通じて、それぞれ交流を行った学生における「国際交流への意識や行動変容」、「国際交流から得られることや問題点」、「向性の変化の有無」など、どのような効果や影響があるのか、その違いはどのようなものか、などを交流の活動前・後でアンケート調査を実施し、分析を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

【対象】今回は、「受け入れ交流」の学生においては、台湾学生の世話をするホストクラスの「担当学生群」と授業などで少ないながら交流の時間があつた「非担当学生群」、そして台湾訪問で現地交流をここなつた「訪問学生群」の 3 つのグループ群にて検討を行った。ただ、今回の統計解析においては、単純に各学生群の国際交流の前・後での変化についてのみ統計分析を行うこととした。今回は、その後の経過として交流終了後 3 か月から 6 か月の時点で調査を一部行っているが、2024 年 3 月に実施した台湾へ訪問して交流を行った学生(訪問学生群)のその後の経過(3 か月~6 か月後)については、これから調査を行うようになり、この国際交流終了後の経過における分析と結果については今回の報告に含めることができなかった。対象は、受け入れ交流を行った学生 87 名(非担当学生群)と 53 名(担当学生群)、そして 18 名(訪問学生群)であった。調査期間は、2019 年~2024 年(内 2 年間は新型コロナウイルス感染症の流行で中断を余儀なくされた)であった。

【調査方法】

(1) 国際交流に関する意識調査

国際交流による「意識や行動変容」に関する調査で、現在の就学意欲、自己効力感、自身の専門性、海外留学への意識、国際交流意識、国際活動の経験や意欲、学修時間、などについてアンケート調査(質問紙調査)を実施した。実施は、1) 留学生受け入れ・訪問交流の開始前、2) 留学生受け入れ・訪問交流の終了後で実施し、それぞれの国際交流の活動前・後でどのような意識や行動の変化が想起されるのかを調査した。このアンケート質問紙では、回答においてリッカー

ト尺度（5～7段階尺度）を用い、学生に回答を求めようとした。

(2) 国際交流から得られるもの

国際交流を行うことでどのようなものが得られるのかについて、いくつかの項目を設定し、7段階尺度（リッカート尺度）にて回答を得た。

(3) 国際交流で問題となるもの

また国際交流を行うにあたり問題となっている点や問題となった点について、交流前後にて回答を求めた。同じく、回答には、リッカートスケール（7段階尺度）を用いて回答を求めた。

(4) 向性検査（淡路・岡部式）

今回、国際交流を行うことで、学生の向性傾向（内・外交性）の変化が生じるのかどうかについても調査を行った。この調査は50の質問からなり、「はい」「いいえ」で回答し、向性指標が算出され、その指標を基に「超外向性」「外向性」「内向性」「超内向性」の4つに分類されるものである。

【統計解析】

今回の解析において、3つの学生群では交流前の国際交流に関する意欲や意識に違いがあり、3群間の比較は実施せず、各群それぞれの国際交流前・後での変化の有無を軸として解析を行った。解析には、各群の前後比較で対応のある2群比較（2時点比較）となり、また各調査による回答をリッカートスケールの尺度回答で得ており、順序検定であるWilcoxon順位検定を用いて変化の有無について分析を行った。有意性の判定には、 $p < 0.05$ を用いて判定を行った。また、効果量についても算出を行った。

4. 研究成果

(1) 国際交流に関する意識の変化の有無について（表1）,（表2）,（表3-1, 2）

台湾学生と交流することで、本学学生の国際交流に関する意識や行動に変化（変容）が生じるのかを分析した。その結果、意識の変化としては「国際交流または留学への関心・気持ちについて」「国際交流は自身にとって意義がありますか」の質問においては、非担当学生群・担当学生群・訪問学生群の3群ともに、交流前後で有意な変化は示されなかった。しかし、「海外への学生研修（経済的負担なし）へ参加したいか」の質問に対しては、非担当学生群では交流後には低下を示した。担当学生群や訪問学生群では、交流前・後で有意な変化は見られなかった。行動変容として、「自身の普段の授業への参加意欲・学習意欲は変わったか」「自身の授業に対する取り組み姿勢について変わったか」との問いに、非担当学生群では有意に低下を示したのに対し、担当学生群や訪問学生群では、有意な変化や有意に近い変化を示し、日頃の授業に対する学修意欲や取り組み姿勢に良好な変化が想起されていた。

表1. 国際交流に関する意識の変化

	非担当学生群				担当学生群				台湾訪問学生群			
	交流前	交流後	p値	効果量(r)	交流前	交流後	p値	効果量(r)	訪問前	訪問後	p値	効果量(r)
国際交流または留学への関心・気持ちについて	5(3-5)	5(4-5)	p=0.723	0.04 (ほとんどなし)	3(2-4)	3(3-4)	p=0.215	0.17(小)	4(4-5)	5(4-5)	p=0.317	0.26(小)
国際交流は自身にとって意義がありますか	5(4-5)	5(4-5)	p=0.596	0.06 (ほとんどなし)	4(3-4)	4(3-5)	p=0.216	0.17(小)	5(4-5)	5(4-5)	p=0.655	0.12(小)
海外への学生研修（経済的負担なし）へ参加したいか	5(4-5)	4(3-5)	p<0.001	-0.52(大) ↓	3(2-4)	3(2.25-4)	p=0.392	0.12(小)	4.5(4-5)	5(4-5)	p=0.477	0.18(小)
自身の普段の授業への参加意欲・学修意欲は変わったか	4(4-4)	3(3-4)	p<0.001	-0.60(大) ↓	3(3-3.5)	3(3-4)	p=0.065	0.25(小) ↗	4(3-5)	4(4-5)	p=0.062	0.48(中) ↗
自身の授業に対する取り組み姿勢について変わったか	6(5-6)	5(4-5)	p<0.001	-0.53(大) ↓	4(4-5)	5(4-5)	p=0.040	0.28(小) ↑	5(5-5.25)	5(5-6)	p=0.340	0.25(小)

また、国際交流を進められない理由でも、「金銭的問題」ではいずれの群においても交流前・後で変化は見られなかったが、「言語的問題」では担当学生群で交流後に低下する傾向が示され、「自分の問題」では、訪問学生群で交流後に低下する傾向が示された。

表2. 国際交流がなかなか進められない理由は？

	非担当学生群				担当学生群				台湾訪問学生群			
	交流前	交流後	p値	効果量(r)	交流前	交流後	p値	効果量(r)	訪問前	訪問後	p値	効果量(r)
金銭的問題	5(4-5)	5(4.5-5)	p=0.589	0.08 (ほとんどなし)	5(4-5)	5(4-5)	p=0.452	-0.13(小)	4.5(3.75-5)	4.5(3.75-5)	p=0.942	-0.02 (ほとんどなし)
言語的問題	4(3-5)	4(4-5)	p=0.222	0.18(小)	4(4-5)	4(3-5)	p=0.079	-0.33(中) ↘	5(4-5)	4(3-5)	p=0.202	-0.34(中)
自分の問題	4(3-5)	4(4-5)	p=0.326	0.16(小)	4(3-5)	4(3-5)	p=0.980	0.08 (ほとんどなし)	5(4-5)	4(1.5-5)	p=0.063	-0.52(大) ↘

「国際交流に関して始めたことはあるか」との問いに、いずれの群においても有意な変化が見られ、交流前に比べ、交流後には何かを始めた学生が有意に増えていた。その交流後に始めたことの内容について尋ねたところ、「外国語を習い始めた」と回答した学生がいずれの群においても交流後に多くみられていた。また「国際交流について調べるようになった」「海外留学について調べるようになった」「海外でのボランティア活動について調べるようになった」との回答もそれぞれの学生群でわずかだが増えていた。

表3-1. 国際交流に関して始めたことはあるか？

	(回答時期)	はい		p値	効果量(φ)
		はい	いいえ		
非担当学生群	交流前	4	83	p = 0.045	0.16(小)
	交流後	10	64		
担当学生群	交流前	4	49	p = 0.024	0.22(小)
	交流後	13	43		
台湾訪問学生群	交流前	8	10	p = 0.037	0.36(中)
	交流後	12	3		

表3-2. 国際交流に関して始めたことの内容は？

(回答時期)	a. 外国語を習い始めた(n) b. 外国の自習書門用について習った(n) c. 国際交流についていろいろ学べるようになった(n) d. 海外留学について調べようと思った(n) e. 海外でのボランティア活動について学べるようになった(n) f. 海外での観光について調べようと思った(n)						
	非担当学生群	交流前	1	1	2	1	0
	交流後	8	2	1	1	3	0
担当学生群	交流前	2	1	1	0	0	0
	交流後	11	0	4	4	0	0
台湾訪問学生群	交流前	7	1	1	1	0	0
	交流後	11	1	3	1	0	1

(2) 国際交流で得られるものについて (表4)

国際交流を行うことで、得られることについて尋ねたところ、非担当学生では「国際的ネットワーク」への回答が低下傾向を示したのに対し、訪問学生群では「語学力」「異文化感性」「国際的ネットワーク」が得られるとの回答が有意に増加し、「就職活動に役立つ経験」「異文化との触れ合い」「自己の内的成長」との回答も増加傾向を示していた。ただ、台湾学生の受入れ担当を行った担当学生群では、交流後に得られるものについて変化は見られなかった。

表4. 国際交流から得られるもの

	非担当学生群				担当学生群				台湾訪問学生群			
	交流前	交流後	p値	効果量(r)	交流前	交流後	p値	効果量(r)	訪問前	訪問後	p値	効果量(r)
語学力	5(4.2-6)	5(5-6)	p = 0.700	-0.04 (ほとんどなし)	5(4.5-6)	5(4.25-6)	p = 0.970	-0.05 (ほとんどなし)	6(5-6)	6(6-7)	p = 0.033	0.54(大)
異文化感性	6(5-6)	6(5-6)	p = 0.187	-0.15(小)	6(5-6)	6(5-6.75)	p = 0.843	-0.03 (ほとんどなし)	6(5.5-7)	7(6-7)	p = 0.039	0.52(大)
国際感覚	5(5-6)	5(5-6)	p = 0.652	-0.05 (ほとんどなし)	6(5-6)	6(5-6)	p = 0.917	-0.06 (ほとんどなし)	6(5-7)	6(5-7)	p = 0.144	0.29(小)
専門知識	5(4-5)	5(4-5)	p = 0.992	0.00 (ほとんどなし)	5(4-5)	5(4-5)	p = 0.663	-0.06 (ほとんどなし)	6(4.5-6)	5(5-6)	p = 0.659	0.11(小)
国際的ネットワーク	5(4.25-6)	5(4-6)	p = 0.056	-0.21(小)	5(4-6)	5(4.25-6)	p = 0.346	0.13(小)	6(5-6)	6(6-7)	p = 0.046	0.50(大)
就職活動に役立つ経験	5(4-6)	5(4-6)	p = 0.214	-0.14(小)	5(4-5.5)	5(4-6)	p = 0.934	-0.01 (ほとんどなし)	5(5-6)	6(5-7)	p = 0.069	0.46(中)
異文化との触れ合い	6(5-7)	6(5-6)	p = 0.195	-0.14(小)	6(5-6)	6(5-7)	p = 0.866	0.02 (ほとんどなし)	6(6-7)	7(6-7)	p = 0.058	0.47(中)
自己の内的成長	5(5-6)	5(5-6)	p = 0.298	-0.12(小)	5(4.5-6)	5(4-6)	p = 0.715	-0.05 (ほとんどなし)	6(5-7)	6(6-7)	p = 0.070	0.45(中)

(3) 国際交流で問題となることについて (表5)

国際交流を行うのに問題となることについて尋ねたところ、担当学生群では「留学生と交流する時間がない」との回答が交流後に高まる傾向が示されていた。一方で、「留学生との文化の違いに不安がある」との回答は、交流後には有意に低下を示していた。訪問学生では、「留学生と関わることに不安がある」との回答が交流後には有意に低下を示した。

表5. 国際交流で問題となるもの

	非担当学生群				担当学生群				台湾訪問学生群			
	交流前	交流後	p値	効果量(r)	交流前	交流後	p値	効果量(r)	訪問前	訪問後	p値	効果量(r)
自身の日常的な外国語力が不足している	6(5-7)	6(5-7)	p = 0.858	0.02 (ほとんどなし)	6(5-7)	6(6-7)	p = 0.961	0.01 (ほとんどなし)	6(5-7)	6(6-7)	p = 0.669	0.11(小)
自身の学術専門的な外国力が不足している	6(6-7)	6(6-7)	p = 0.488	0.03 (ほとんどなし)	6(6-7)	6(6-7)	p = 0.625	0.07 (ほとんどなし)	6(6-7)	6(6-7)	p = 0.873	-0.04 (ほとんどなし)
交際費がかかる	5(4-6)	5(3-6)	p = 0.002	-0.35(中)	5(3-6)	5(4-6)	p = 0.586	0.08 (ほとんどなし)	4(3.5-5)	5(4-6)	p = 0.160	0.36(中)
交流する場所の確保が難しい	5(4-6)	5(4-5)	p = 0.386	-0.10 (ほとんどなし)	5(4-5)	5(3-6)	p = 0.546	0.08 (ほとんどなし)	4(2.5-6)	5(3-6)	p = 0.964	0.01 (ほとんどなし)
留学生との交流イベントを探すのが難しい	5(4-6)	5(4-5)	p = 0.624	-0.05 (ほとんどなし)	5(4-5)	5(3-6)	p = 0.962	-0.07 (ほとんどなし)	5(2.5-6)	5(4-6)	p = 1.000	0.00 (ほとんどなし)
留学生と交流する時間がない	5(4-6)	5(4-6)	p = 0.433	-0.09 (ほとんどなし)	4(4-5)	5(4-6)	p = 0.092	0.23(小)	4(2-6)	5(3-5)	p = 0.440	0.20(小)
留学生と交流するための準備が大変である	5(4-6)	5(4-6)	p = 0.372	-0.10 (ほとんどなし)	5(4-6)	5(4-6)	p = 0.487	0.10 (ほとんどなし)	5(4.5-6)	5(5-6)	p = 0.928	0.02 (ほとんどなし)
留学生との文化の違いに不安がある	5(3-6)	5(4-6)	p = 0.731	0.04 (ほとんどなし)	5(4-6)	4(2.25-5)	p = 0.040	-0.28(小)	5(4-6)	4(2-5)	p = 0.111	-0.41(中)
留学生とかわかることに不安がある	5(4-6)	5(4-6)	p = 0.936	0.01 (ほとんどなし)	5(4-6)	5(3-6)	p = 0.274	-0.15(小)	5(3.5-6)	3(1-5)	p = 0.040	-0.53(大)

(4) 国際交流前後での性格傾向の変化の有無について (表6)

国際交流を行うことで、外向性や内向性といった性格傾向の変化についても調査を行ったが、それぞれの群において有意な変化は見られなかった。

表6. 国際交流前後での性格傾向の変化の有無

	(回答時期)	超外向性		外向性		内向性		超内向性	χ二乗 (p値)	効果量(φ)	性格指標数	p値	効果量(r)
		超外向性	外向性	内向性	超内向性								
非担当学生群	交流前	5	50	23	0	p = 0.875	0.04 (ほとんどなし)	112 (100-132)	p = 0.550	0.07 (ほとんどなし)			
	交流後	7	54	23	0								
担当学生群	交流前	1	38	12	0	p = 0.193	0.17(小)	120 (101-136)	p = 0.812	-0.04 (ほとんどなし)			
	交流後	6	38	14	0								
台湾訪問学生群	交流前	2	12	4	0	p = 0.835	0.10(小)	130 (102-136)	p = 0.979	-0.07 (ほとんどなし)			
	交流後	1	12	3	0								

(5) 考察

1) 国際交流に関する意識の変化について

「国際交流や留学への関心・気持ち」「国際交流の意義」について、いずれの学生群でも交流前後で有意な変化は示されなかった。これは、非担当学生群や訪問学生群では、交流前より関心や気持ち、自身への意義は高く示されており、交流後も継続されたことで有意な変化としては現れなかったものと考えられた。一方、担当学生群では、交流前は他の2群に比べやや低い傾向にあり、交流後は高まる傾向が期待されたが、有意な変化としては現れなかった。このことは、担当学生群において、多くの交流時間や一緒に活動を持ったけれども、交流の中で楽しい時間だけで

はなく、困難な面や時間もそれなりに体験し、有意な変化に繋がらなかった可能性も考えられた。その他、「海外での学生研修への参加」や「自身の普段の授業への参加意欲・修学意欲の変化」、「自身の授業に対する取り組む姿勢の変化」などでは、非担当学生群では有意に低下をしていた。これは、少ない時間ながら台湾学生と授業などで関わることで、英語でのコミュニケーションがうまく取れなかった経験や台湾学生の知識の高さなどを実感し、そういった短い時間では交流による楽しいプラス要因を持つ機会が少なく、マイナス要因が強く働いた可能性がある。一方で、担当学生群や訪問学生群では、普段の授業への参加意欲・修学意欲は高まる傾向が示され、担当学生群では普段の授業への取り組む姿勢も有意に高まること示され、受け入れ交流においても学生へ有効な効果が期待できることが示唆された。これは、多くの時間を台湾学生と過ごすことで、楽しい経験や時間、価値観の共有など、プラスの要因を多く体験したことによって生じたものと考えられた。また、こうした国際交流がなかなか進められない要因として考えられる「金銭的問題」「言語的問題」「自分の問題」において、担当学生群や訪問学生群では、言語的な問題や自分の問題において交流後には低下する傾向が示唆され、交流前には問題と感じていた点が、交流後には改善していく傾向が見られた。これも、交流する機会や活動、時間を多く共有することで、コミュニケーション手段の発達やコミュニケーションが取れるようになったという経験により、外国の人との関わりへの不安も低下し、また訪問して現地で実際に交流することで、不安や心配事の軽減を実感したことが、これらの問題点の改善傾向に繋がったものと考えられた。国際交流に対して「始めたことはあるか」との問いについては、いずれの群でも「はい」との回答が交流後には有意に増え、始めたことの多くが「外国語を習い始めた」との回答であった。これは、受け入れ交流にしろ、訪問交流にしろ、また交流時間の多い・少ないに関わらず、外国人とのコミュニケーションでは外国語特に英語の会話スキルは重要であると改めて実感したことや、台湾学生の英語力の高さを実感したことが、影響因子として考えられた。今回の調査では、受け入れによる国際交流においても交流時間や交流頻度、交流内容などによって、国際交流への意識や行動変容へ有効な効果を生じさせることが示唆され、受け入れ交流においては、こうした点を充実していく交流内容・環境の設定が重要と考えられた。

2) 国際交流で得られるものについて

学生自身が得られると感じることについて、非担当学生群や担当学生群では交流前・後で有意な変化は見られなかったが、訪問学生群では、多くの項目で向上する傾向や有意に高まること示された。これは、3群ともに交流前からこれら多くの項目で国際交流を通じて得られるものとして高く考えており、担当学生群では交流前に考えていたように受け入れによる交流の中で多くの時間の共有や活動・コミュニケーションを通じて実感できたことで、有意な変化には結びつかなかったものの、高い傾向のままとして示されたものとする。訪問学生群も交流前(訪問前)には多くの項目で得られるものとして高く期待している傾向が示されていたが、訪問後には更に強く実感できたことが有意な向上として現れたものとする。これは、国内ではなく現地(海外)という環境(人的、環境的)に立つ・居ることでしか感じられない要因が、交流後に更なる向上へつながった要因であると思われる。国際交流の受け入れと訪問交流での大きな違いとして示されたものとする。担当学生群の受け入れ交流は5週間であり、訪問交流は1週間~2週間で、交流期間に違いがあるものの、訪問交流では時間的な要因以上にその環境に入り、活動・時間の共有の内容や密度などが異なり、現地での国際交流がもたらす効果は、学生へ影響を及ぼす強い要因であるものと考えられた。

3) 国際交流で問題となることについて

国際交流にて問題になることでは、非担当学生群では交流前に考えていた交際費がかかるのではとの問題が、交流後には有意に低下していたのは、交流機会や交流時間が授業内などに限られていたことによる要因が考えられる。一方、担当学生では「留学生との交流する時間がない」といった問題が、交流後には増加傾向を示し、授業の多さやアルバイトなど自由に台湾学生と交流する時間の設定に苦慮していた可能性が考えられた。また担当学生群では「留学生との文化の違いに不安がある」との問題は有意に低下し、交流によって不安が軽減したことが示唆された。同じように、訪問学生においても「台湾学生とかかわることに不安」を持っていたが、訪問後には有意に不安は軽減され、現地での交流経験が不安を軽減させたことが示唆された。このように実際に国際交流を行うことで不安や心配は軽減されることが示唆されたが、軽減されたのは交流時間や内容・活動などが多く経験できた学生群であり、こうした問題を軽減するためには、交流の時間や機会・活動を多く共有できることが重要であるものと考えられた。

4) 国際交流による性格傾向の変化有無について

国際交流という外国の人との交流や時間の共有、コミュニケーションを行うことで、いずれの学生群においても交流前・後で有意な性格傾向の変化は見られず、受け入れ交流・訪問交流という交流方法の違いにおいても大きな影響は及ぼさないことが示唆された。これは、いずれの学生群においても交流前から外向的な学生が多く、交流により更なる向性の変化(超外向的)へまでは影響を及ぼすほどではなかったものと考えられた。一方で、今回は分析できなかったが、交流前に「内向性を示していた学生」に焦点を当て、交流後の変化の有無を分析することで、国際交流(受け入れ交流、訪問交流)による効果・影響の有無を確認することができるものと考えられた。こうした分析により内向きな学生への国際交流への意識・姿勢の「変化」を想起する国際交流の在り方へ何らかの示唆を得ることができるのではないかと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 白石英樹, ドン・ウェンリン, 唯根弘, N.D.Parry	4. 巻 第27巻
2. 論文標題 本学学生の国際交流に対する意識に関する調査—2つの交流スタイルによる比較—	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 茨城県立医療大学紀要	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高崎 友香 (Takasaki Yuka) (00815029)	茨城県立医療大学・保健医療学部・助教 (22101)	
研究分担者	N・D Parry (PARRY NEIL DAVID) (50274973)	茨城県立医療大学・保健医療学部・教授 (22101)	
研究分担者	福井 龍太 (Fukui Ryuta) (50555480)	茨城県立医療大学・保健医療学部・助教 (22101)	
研究分担者	唯根 弘 (Yuine Hiroshi) (20845911)	茨城県立医療大学・保健医療学部・助教 (22101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------